

とがりん

月刊 発行会員新聞
編集酒谷義郎

写真図書館

今の目標は、チミイ厚かましさが
百才まで元気で生きたんねん

お一人様です。

お一人様です

なんた坂 こんな坂 ⑮

幼児の頃は、庭先の見える奥座敷で祖母と一緒の布団で、寝付くまで色々な話を呉れた。丹後地震や京焼けと言われる大火災の話も聞きたから、乳の出ない乳房を吸って寝付いた。少し大きくなり「軒下で隣の家(木村様)に、同歳の女の子が居て、毎日の様に、その家遊び、常盤幼稚園(丸物・現ヨドバシカメラ傍)と一緒に通った。当時数少ないバス通園で、黄組・田中先生女性・同じコースを通過ので、今も幼稚園友達の家を覚えており、前を通り、居るかなと覗き込む。10年程前迄は、顔を会わせることも有ったが、今は一人も居なくなつた。居ても判らないだろうが。

その頃、店には、番頭新吉とん、丁稚、栄吉、政吉、貞吉、升吉。女中のお加代さん等が居た。全員本名無し(前に源吉とんと言う人が居たが、祖父が、堀川商店街で、別家させた。別家同業を開店準備万端し独立させる事。幼児からお世話になった、その方々の葬儀のお手伝いしお送りした。居所不明の升吉とん以外は、その別家の方も生前は盆暮れには、必ず挨拶にお越しになった。特に、私の付け人役だった、政吉とんは、我が父一郎



昭14年頃店頭：上の看板
現存 * 幼児義郎、隣祖父



その頃、テレビ人気番組で、番頭はとん、丁稚は新吉とんが放映されていたが、今や、当時の家族的な徒弟な雇用関係は、殆ど消えた様だ。女工・衣史・細井和喜蔵著の様な劣悪な雇用関係もあつたが、一方で分家(同業開店)で応援する仕組みも有った。祖父と父の代を併せ、分家の様な店が七店有つたが、酒屋も時代の流れに購えず、殆ど廃業。今や、二店舗になつてしまつた。我店も1F「パン・二・ファミマ2F酒屋だ!!」

の歿時、葬儀の世話をしてくれ、その丸一ヶ月後、後を追いかける様に急病死した。残された彼の奥方に、当時、私が経営していた、京都大丸近くの錦・神馬酒場(千本神馬弟店)任せた。後、彼女が没し、他に譲つたが、今も当時の面影を残した姿で盛業中だ。

の歿時、葬儀の世話をしてくれ、その丸一ヶ月後、後を追いかける様に急病死した。残された彼の奥方に、当時、私が経営していた、京都大丸近くの錦・神馬酒場(千本神馬弟店)任せた。後、彼女が没し、他に譲つたが、今も当時の面影を残した姿で盛業中だ。

稲荷山
ぶらり散策記 ③⑨
越智重史



この現象に対してどのよう

歴史文化の観光資源化を正しく考えないと歴史の矮小化につながりかねない。新自由主義経済の下ではとなく売れる(考える)ものを抜き出して歴史の全体像を見失つてしまふからである。これは多くの歴史家が危惧していることである。

稲荷山は富士山や御嶽山などと比べて小さいが、これら大山の山岳信仰と軌を一にしているという。山嶺に神霊があり、中腹に中院、山麓に拝殿と完全な山岳信仰形態を擁して発展してきたのだ。

稲荷山は富士山や御嶽山などと比べて小さいが、これら大山の山岳信仰と軌を一にしているという。山嶺に神霊があり、中腹に中院、山麓に拝殿と完全な山岳信仰形態を擁して発展してきたのだ。

稲荷山は富士山や御嶽山などと比べて小さいが、これら大山の山岳信仰と軌を一にしているという。山嶺に神霊があり、中腹に中院、山麓に拝殿と完全な山岳信仰形態を擁して発展してきたのだ。

稲荷山は富士山や御嶽山などと比べて小さいが、これら大山の山岳信仰と軌を一にしているという。山嶺に神霊があり、中腹に中院、山麓に拝殿と完全な山岳信仰形態を擁して発展してきたのだ。

稲荷山は富士山や御嶽山などと比べて小さいが、これら大山の山岳信仰と軌を一にしているという。山嶺に神霊があり、中腹に中院、山麓に拝殿と完全な山岳信仰形態を擁して発展してきたのだ。

稲荷山は富士山や御嶽山などと比べて小さいが、これら大山の山岳信仰と軌を一にしているという。山嶺に神霊があり、中腹に中院、山麓に拝殿と完全な山岳信仰形態を擁して発展してきたのだ。

なんた坂 こんな坂 ⑮

祖父が、私の名の義郎と「義」の字を用いたのは、明治以前は跡継ぎ(長男)が義左衛門の名を引継いで来たからだろう。我が家が「京」に移住したのは明治中期、それ迄は、宇治の炭山という山村に住んで居ました。其処は、山奥で昭和27年に、地元の方々の運動でヤット電気が通じた様な山村でした。

戦時中その村に縁故疎開をして、いた私は、夜、ランプが点ると、淋しく蒲団の中で声を出さず泣きました。月一度京都へ帰ると、「母」に物凄く剣幕で叱られ、即、追い返される事もありました。ズーと後、私が自動

車免許を得る際、判つたのですが、当時は、当時。占領軍病院になつていて、日赤の調理場勤務の人が、ハム等残りを廻して呉れた。酒、醤油味噌も配給時代で、各家庭に配られる切符の数に応じて、商品が割り当てられるので、その切符集めで、近所のご同業の方との競争で、戦後二、三年は大変だった様だ。

やや落ち着いた昭和24年、酒類販売公団解散で「酒卸免許制度」ができた。父からその卸免許を申請すると聞き、私は高校で商業コースを選び、中間販売卸業の将来に不安を感じ反対したが、聞き入れられず、許可が得られ、酒問屋酒谷本店がスタートしました。同時に、当時、店員だった河内康男君「名義で酒小売免許を得て、いづみ屋」の屋号の店を当社向側(大黒湯前)で開店し、後法人化し、その店が、周り廻つて、現在の当社になった。

哲学者の梅原猛さんの御説を拝借しておく。もともと稲荷山の神は稲作の神ではなく、農耕以前の狩猟採取の神であつたという。それは樹木や動物を御正体とする神であつた。ところが秦氏がこの辺一帯を支配し、土着の神(狩猟採取の神)を支配した。経済力と武力で古い神を征服したので、古い神の木である杉の、木を植えて、杉の木が根付いたら幸い、枯れたら災いという事になった。

二月の初午の日に、杉と椎の枝で作った青山飾り(写真上)を本殿や末社に飾る習わしがあるが、これも古い神の崇りを鎮めるためのものであろう。

上社・中社・下社とあるが、上社の神は狩猟採取の神であるが、中社・下社は稲作の神という。稲作農業を司る秦氏が支配したのは、中社・下社で、上社はまた昔の狩猟採取の神の名残りを留めているというのだ。

京都&東山
ぶらりピカリ 77

七条通
京都の通り 28

鳥辺野

豊臣秀吉公御墓所
スタートで七条通りは西京極へ至る長い通りです。東山からの坂は我家前が「一番低くなっています。お客さんからは 低いと塵も積もれば山になる、お金が溜まるエエ場所ですなあ」と良く言われますが、砂やゴミの方が、もっと多いのです。



七条大橋から見た東山の阿弥陀ヶ峰、頂上に秀吉公墓所

七条大橋から見た東山の阿弥陀ヶ峰、頂上に秀吉公墓所
墓地の一つだったそうです。そして其の延長で、今も阿弥陀ヶ峰の北東に、市の火葬場があります。今、霊柩車は、そこへは、広くなった五条通を利用しますが、過つては七条通経由で、渋谷通りから行くのです。それで良く霊柩車に出会つと、親指を他の四本指で隠しました。親を護る様のマシナイです。

す。今は、その様な習慣は残っていないでしょうね。子が親を殺す事件や真逆の事件が再々ある変な時代になりましたから。

前号で「太閤坦」を書きましたが、その麓、知積院正門」が、案外、京の吉方「辰巳」の方向だったからかも。また、その麓に、京大仏殿や耳塚を、自ら命で建造されたたからでしょうか。

三十三間堂。国立京都博物館も直近にあります。そこは、本堂館内に入るには、料金が要りましたが、邸内は自由に入れました。三十三間堂の北側の小さな庭で、少年野球をし、本堂に当たった料でしたが邸内は無料でした。池で魚釣りをして叱られました。

過つて、その辺り 東山七条付近」一帯を「鳥辺野（とりべの）」と呼ばれて、いわゆる死体置き場だった様です。化野（あだしの）、蓮台（れんたいや）という三ヶ所の風講の後、現在のホテルになったのです。朝鮮戦争時、旧日赤病院が米陸軍病院になり、日赤が其処へ移転し、後、現在のホテルになったのです。その頃は、貧乏な 扇子と清水焼きの職人の町。子沢山で小学校は満員で二部教室になったこともありました。拾数年後、子供が減少し、閉校になりました。私は卒業後70年以上になりますが、マダ毎年同窓会があります。

市電が走った 京都を巡る

福田静二

85

本号で連載していましたが市電が走った街 京都を巡る」も、今回で「二応のピリオドを打つことになりました。

平成二十三年三月、サカタさんのすぐ近くにあった停留場「七条大橋」から連載をスタートして以来、八十五回に渡つて京都市電の停留場を探り上げて、周辺の来歴思い出について綴ってきました。

京都市電の停留場は、伏見・稲荷線が廃止される前の昭和四十五年三月時点で、二六三所ありましたので、ちょうど半分の停留場を紹介したことになります。私としては、すべての停留場を紹介したい気持ちもありましたが、とんからりんの最終号を迎え、前回の「知恩院前」で、停留場の



連載は「七条大橋」からスタートしました。右手にサカタさんの旧店舗が見える時代でした。

紹介も終わることになりました。

京都市電は、伏見 稲荷線から段階的に廃止が進み、昭和五十三年十月の外周線の廃止で、市電は京都の街から姿を消しました。全廃から数えて、今年がちょうど四十周年の年に当たります。生まれながらの鉄道好きで、京都に生まれ育つた私にとつては、当然のように、最も身近な鉄道である京都市電が好きになりました。その廃止を惜しんで、多くの写真を撮り続けました。

サカタさんでは、写真展を何度も行つたり、朝がゆ会や、懐かしの京都市電のアーで話をしたり、また写真集も出版しました。

ただ写真を撮るだけでは、京都市電を語り尽くすことはできません。自分の気持ちをしつかり表現できるのは、文字で表現するしかなく、毎回、決まった文字数のなかで、思いを綴ってきました。停留場と見ると偏りがあり、決められた文字数に収めるのに苦労したこともありましたが、机上の作業だけでなく、現地へ出かけて行つて取材したことも多かったです。

京都には、重層的に歴史が積み重なっていること、街を歩いていて何気ない史跡や碑にそれを感じました。こんな歴史の積み重なった街は、京都以外では見られません。つづく京都は奥深い街だと再認識しました。

京都の街は、大阪や東京に比べると変化は少ないように見えますが、四十一年のスピードで、相当な変化を遂げていることも判りました。市電時代の街並みや人々の出会いは、遠い思い出になつてしまいました。あらためて

京都市電の最終日、昭和53年9月30日、私は最後の市電を烏丸車庫前で見送りました。市電の前に掲げられた「終」の標識が、もうこれから市電は走らないことを示しています。とんからりん も終電車、本当にお疲れ様でした。



四十年という歳月の隔たりを感じたものでした。

最後に、長らくお付き合いいただいた読者の皆さまには、厚く御礼を申し上げます。そして、浅学にして文才のない私を、最後まで応援していただいた発行者の酒谷義郎様には、感謝の言葉もありません。

京都市電は、今も私の心のなかに走り続けています。引き続き、京都市電の語り部として、また皆さまにお目に掛かりたいと願っています。

福田静二様：85回に亘りご投稿、誠に誠に誠に、有難うございました。私めも、その回数と同じ85歳になり、残念ながら、能力気力の低下は否めず、とんからりん」を今号で月刊」終了と思つていいる所です。

何んだ坂 こんな坂 18

祖父の代から酒屋だった昭和13年頃、酒は醸造から販売迄「免許制」になった。それまでは、どこでも売ったので、酒を売る店が多かった。それを減らす為、税務署毎に「整備委員会」(昭和15?)が設けられ祖父写真も委員になり、



それまで酒を売っていた店に廃業を勧める役になり「可哀想でカナン」と言っていた。同時に、酒屋で酒を飲ます事も禁じられた。我家は、その前年に、東側の家を写真譲り受けていたので、そこを飲食店にして「国民酒場」として続けられた。敗戦半年位前から後半は、酒が無く休業した。

父は官制の酒屋の「京都酒類統制会社」に勤務していた。酒類の少ない時代、その卸は大名商売だった様で、後に、酒卸業になる「下敷き」になったと思っている。戦時中は、父は兵役に行ったが病気で除隊。その後、陸軍航空隊の「物資購入会社」に勤務した。終戦直後、航空隊用の「エチールアルコール」や「帆布」を在庫を我家で保管し後購入した。そのアルコールは水割りし、度数を落とし、焼酎で売ったり、大阪の宗右衛門町で、



写真は昭和30年、酒蔵時代の現在

「単舎利別シロップ、琥珀酸、グルタミンソーダー、カラメルを買いたい求め自家製の「合成清酒」をつくり「酒場」等に、売り捌いていた。戦後のドサクサ時代の事だが、また、帆布は、今や著名な「沢帆布さん」に持込み(昭和24)、最初は断られたそうだが、無理に頼んで、私が今も使っている酒屋袋と「札入れ」を創って貰った。後「澤さん」も「帆布」を使った商品を世にお出しなさった。その年、弟、宗男が生まれた。父は、子供の事に無頓着な人で、名前は、妹と同様、(義)母に頼まれ、字角等を本で勉強して提案したものになった。上の妹は亡くなったが、名前を付けた二人は、元気で、今の私を支えてくれている。戦後日本のドサクサ時代は、我家も超ドサクサ時代だったが、私の代で全て世間並みに治まった。

終わりの日、始まりを思い出す 月三天

始まりがあれば終わりがあつた。世の常であり、一月の教室の日に、三月で終わります。物語でいう「おわり」、ピリオドを打つということ。一月の教室の日に、三月で終わります。物語でいう「おわり」、ピリオドを打つということ。一月の教室の日に、三月で終わります。物語でいう「おわり」、ピリオドを打つということ。

新たなはじまり 鍾嬢文子 Fumiko Kouketu



サカタニさんが毎月発行してきただけで、今号で最後になるとうかがいました。私は、サカタニさんと同じ地域で活動するミナジヤン、フラー、パッド、写真の「ネジャー」として、二年ほど前からこちらに寄稿させていた。前回は、特別な気持ちで執筆した。サカタニさんの社長である酒谷義郎さんが、平成七年より毎月欠かさず発行してきた地元密着情報誌です。創刊当初は同土とともに編集・発行作業をされてきたそうだが、その後、お一人で企画執筆から編集・制作・印刷までされてきました。御歳八五歳にして、お一人で四ページにもなる紙面を制作し、パソコンを駆使して編集されていくことは驚くべき偉業であり、その成果として生まれた本誌は読者に希望を与えてくれる素晴らしい作品だと私は思っています。

「終わりの日」と言われると「始まり」を思い出すのはなぜでしょう？ その当時は京都弁も分かりませんし、東西南北で表現する道案内も分からない状態で、地図を両手で開いて歩いていました。こちらに住む前から、一度電車に乗って京都の下見をしていたつもりでも、分からない事ばかりありません。旅行で来るのと住むのではやはり違いますね。生で聞く関西弁はテレビで聞くものとは全く違い、何を話しているのか分からないためまるで異国です。関東のテレビで流れている関西弁は、テレビ用なんだなと知りました。こんな状況になると、ホームシックになるらしいですが、私の場合は学生時代同様全くそんなことにはなりません。それは今も継続中で、年

ます。二十年以上も続けられてきた作業に終止符を打つことは、続けていくことより大きな勇気が必要だったこととでしょう。私は、本誌の廃刊をこ

決断された酒谷さんのお気持ちに、深い感謝を受けました。この終止符は決して終わりではなく、ありのままを受け入れられた酒谷さんの新たな始まりだと、そう感じています。最終号となる本誌は、ごんからりんの第二十二号「ゾロ目の数字は、西洋では「天使の番号」と呼ばれます。様々な暗示があると言われています。二がならぶ番号の意味は「信じて進め」。願いや思いが叶う直前にあるので、今が大変でも辛くても、信じる心と前へ進む勇気を忘れてはいけません。と天使は告げてくれていた。

に数回掛かってくる電話で十分です。徐々に京都には慣れましたが、関西弁を使うのは勇気がいりました。というのも、どうしても話し言葉が出身地の方言交じりになってしまっている。それに、言い回しが間違っていたらどうしよう、などという恐れもあります。方言とは難しく、出身地では何ともない言葉がそこでは地雷だったりますからね。でもどつぷりと京都にいたお陰で、まだ不慣れではありますが消しゴムはんこ教室に来てくださる方々と関西弁でお話できるようになりました。思い返すとまだ出てきますが、今はこんなところでしよう。それでは、ありがたうございました。またどこか。(おしま)

編集後記

編集者 ちん 満85才。眼も耳も良く、身体も元気ですが、頭が弱くなりました。ツイン、持ったへ探し再々身体は、毎朝5時半起き乾布摩擦・柔軟体操と竹刀を20回振り、バーベルで手首を鍛えています。飽きもせず毎朝毎朝毎朝。△そのお陰で、風邪も挽かず少々血圧が高めで、月火水木金金、店に出られています。が、報酬は雀の涙、低額です。△大昔 万国の労働者団結せよ！と叫んでいた運動に、深く関わっていた時代があつて、純然たる資本家にはなり難いのです。△デモ、新聞や組織つりには当時の経験が役に立っています。が、他の資本家程高い報酬は取っていません。公務員の係長位。△わが社は、税務調査を良く受けますが、少々解釈相違の修正のみ。是認の優良納税者、優良な日本国民です。△とんからりん、編集者の能力、体力低下もあり、月刊発行を隔月又は随時発行に変更を思案中です。通常発行四月号に決めます。△意見メール歓迎。△始めが有れば、終わりが有りは当然ですが、矢張り終わりが一番むづかしい。この感で気が付きました。△終わらない、次は来ません。次もガンバロウ！。つか